秋高同窓会だより

発行者
秋田県立秋田高等学校
同窓会
印刷所
秋田マイクロ写真印刷㈱

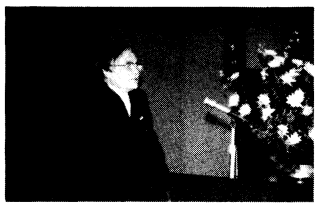
四百五十四名を迎えて 同窓会入会式(7/3)

三月七日、小体育館（講堂）で秋高第33回卒業証書授与式が行われたが、卒業生四百五十四名（普通科四百十七名、理数科三十七名）は、引き続いて、同じ式場で行われた同窓会入会式で、新入会員として迎えられた。

小玉孝次郎会長（大7卒）の滋味あふるる挨拶ののち、会員を代表して、能登文敏秋大鉱山学部長（昭14卒）が祝福と激励をこめた歓迎の言葉を贈った。

同窓会からは記念品（男子にはネクタイピン、女子にはブローチ）と紅白の饅頭が贈られ、新入会員を代表して、杉田潤君が謝辞を述べ、大島民治副会長の発声で万歳を三唱、万雷の拍手のうちに式を閉じた。

記念品贈呈

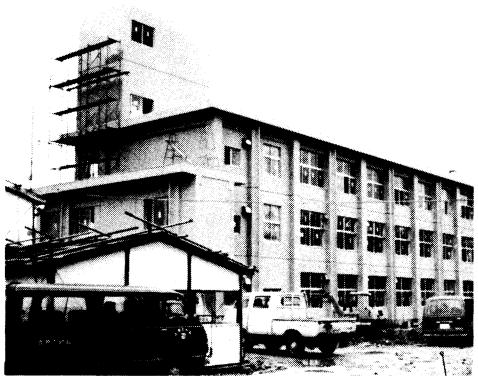

能登文敏氏

秋高新棟完成近し
百十周年・PTAも協力

現在の北棟の北に、新棟はうるわしい全貌を現わしつつある。九月末には完成の予定であるが、引き続いて、八月下旬からは大体育館の改修にかかることになっている。

なお、PTAでは、五月十五日の総会で、創立百十周年への対応の仕方の検討を委託された常任委員と、役員が検討の結果、記念式典の挙行と、大体育館の一部増築等をPTAの記念事業とすることに決定し、六月三十日の臨時PTA総会において承認された。

これにより、創立百十周年記念事業実行委員会は、同窓会、PTA、ともども協力することになった。



学校林視察 5/9(土)

同窓会事業の一つとして、数年ぶりに実施された学校林視察（秋田市仁別薬畑台）だったが、当日は、生憎の小雨模様で、遠路の参加者も含め、34名（同窓会員17名、母校職員7名、秋田市林務課職員3名、地元仁別部落代表7名）の方々も、雨天には困った感じだった。しかし、新緑の山々も雨滴に洗われ、スッキリした姿を映し出していて、予定どおり現地に到着し、早速、それぞれに山に入り、約三町歩の「学校林」に見入っていた。――昭和50年春に、山火事により、杉の成木を伐採、その後地（約八反歩）に植樹した二年生の杉苗も順調に生長しており、将来、美しい山林となって、後輩に引き継がれることだろう。

又、現在、みごとな林となっている杉の木は、昭和四年ごろ、当時の在校生によって、植樹されたもので、すでに五十年以上の年輪を刻んでいるとの事であり、参加者からは、改めて、当時のなつかしい「学校林植樹」に思いが馳せられていた。

そして、更に美しい山林になる様願って視察を終えた。又、関係者には、杉苗の根張りをよくすることや、下刈り作業、枝打ち等の管理も十分やっていただくことをお願いし、将来、母校のため、必ず役立つ「学校林」である事を確信し、近くの〝藤倉山の家〟での懇親会へ席を移し、いろいろと参加者の中で「学校林」に因んだ話題に終始しながら懇談し、午後二時終了した。この次の視察には、是非「好天」に恵まれ、より以上の参加を望みたい。（植村記）

参加者は次のとおり。

○副会長大嶋民治（S8）
伊藤義雄（T9）佐藤貞之助（T12）
石井乃武夫（T12）池田吉郎（T14）
笹山秀武（S5）相沢謙一（S5）
金山和義（S7）伊藤幸枝（S7）
藤本儀三郎（S8）三川敏夫（S10）
加藤芳男（S10）大槻家静（S13）
秋山まり子（S29）山寺慎子（S30）
植村久美（S37）新野建臣（S42）
○吉田直也秋田市林務課長
佐々木道夫係長（S30）
○秋山光雄校長
一関吉美（S14）山谷浩司（S20）
○事務局
桝田浩司（S30）根布谷豪（S46）
堀野諒子、安藤健三。

恩師ご健在
松原萬先生（昭15～昭22）

〝松原萬〟先生（昭和15年12月～昭和22年・英語担当・通称〝GANG〟）が先日（五月二十日）来秋された。八十歳とは思えない程お元気であった。

松原先生は、旧制山形高校、文科甲類で英語を学ばれた。一年生で始めて英語を習った恩師の一人である。私に印象深く残っているのは、一つは先生の発音である。英語の発音には同じ語を強く発音する場合と弱く発音する場合で、初心者の耳には、かなり異った音になる場合がある。松原先生は、強い発音を好まれる方でyou, your, you　ユー・ヨー・ユーである。昔の中学一年生では同じ語が先生が変わると、ユ・ユア・ユーとなる。折角覚えた語が変って発音されると、もう全く別の語になってしまうのであった。もう一つは、中学一年生に博文館の英和辞典の長所を、お話しされたことがあった。動詞と前置詞の説明がよいと云うようなことであった。

戦争もだんだん激しさをまし、敵国の言葉の学習にも色々支障が出てきた頃のお話である。

授業中は先生の人徳のせいか腕白坊主どももいたづらをする者も居らず神妙にしていたものだ。

先生が秋中で教えられたのは丁度、戦争が始まり学校がだんだん軍事色が深まり、最後に学業は中止、学徒勤労動員・敗戦・秋中校舎の米軍による接収等々、教育環境が最も混乱した時期であった。以下先生のお話……。

昭和19年学徒動員令で四年生は群馬の太田に出発したが、学年主任として同行した。当時食料不足がひどくなり、動員された生徒達の健康管理が問題となり、なるべく早期に我々の動員が解除されるよう運動を始めた時、あの非常時に、色々好意的ご配慮をいただいたのが、中島飛行機設計技師として在職されていた、現能代市長・西村節朗氏（T14卒）であった。また戦後、民主主義運動が勃興し、労働組合運動が盛んになり、中等教員の組合が結成され委員長になったところ、中川秀松校長から、クレームがついた。小学校の委員長は花岡泰雲さんが活躍していたようだ。

先生は昭和22年ご郷里のいわき市に招聘され、市立いわき高校に勤務され、後校長として七十五歳まで教育に専念されたとのことである。現在、富士通顧問のお仕事をしていらっしゃる。先生のご健康をお祈りする次第である。

福島県いわき市滝尻字坂の下23
―3　在住。

（山谷　記）

母校だより

例年美しく咲き匂う桜並木が、春になっても花がちらほら。大雪のため桜の蕾が野鳥に食われてしまったためとか。その桜並木のあるウグイス坂を上り切った小体育館（創立九十周年に建設）外側の壁面に円い時計（太陽電池）が取り付けられた。今年の卒業生の寄贈だが、樹間から仰ぐ時計は、秋高キャンパスにふさわしい光景である。

今年度も人事移動で14名の教職員を送り、新たに16名が着任された。生徒は三月七日、四五四名が卒業、四月七日、四六六名が入学した。この一年生は、秋高百十周年の年には最上級生になる。

今年の進学状況は、国公立大一七四人、私立大一四八人。早稲田は九二人受けて一二人合格、慶応は四八人受けて八人合格と、私立大はだんだん入学困難になってきた。特筆すべきは地元秋大医学部合格が初めて二ケタ（十四人）になったことである。

新学期を迎えて、五月二日の大運動会は快晴であった。例年悪天候に悩まされてきただけに、一同大喜びで気勢が上がった。また、隔年実施となっている全校大平登山が生徒会の強い希望があり、秋には実施の予定だが、昨年並みの快晴を期待したい。

五月十五日、PTA総会で、渡部誠一郎会長、広島吾朗副会長が再任、佐野謙一郎氏が副会長に選出された。

五月九日～一二日の中央地区総体の戦績は、優勝＝陸上（団体・総合）三連覇、剣道（男子団体・個人）、スキー（団体・個人）、二位＝ラグビー、バレーボール、弓道。

硬式野球部は、四月十九日、対秋商定期戦が秋高グランドで行われたが、九回表で投手が崩れた秋高が8対3で敗れ、対戦成績は25戦7勝16敗2引分けとなった。

しかし、春季中央地区大会では準決勝で秋商を11対8で破り、決勝に進出、経大付高を破った金足農高に2対1で惜敗した。次いで全県選抜では昨年に続き優勝をねらったが、戦い利あらず、ここ四年続いたベスト4にも進出できなかった。しかし、甲子園を目指し、夏の大会に向けて猛練習が続けられている。

六月十二日～十四日の全県総体では、サッカーが昨年に続いて二連勝、弓道個人優勝、柔道個人級別で軽量級と中量級で優勝、卓球ダブルス二位、剣道個人二位、以上は全国大会に出場することに決定した。惜しくも優勝を逸した種目は剣道団体・柔道団体、ラグビー、ボートであったが、特に優勝候補No.1だった剣道の敗北は残念であった。

東北大会出場チームは、次の各部である。陸上競技（秋田）、柔道（盛岡）、剣道（秋田）卓球個人（福島）、サッカー（仙台）、硬式テニス（秋田）、ボート（青森）。

なお、陸上（四〇〇リレーとハイジャンプ）は全国大会の出場権を得た。

工事中の新棟は、窓ガラスも入り、現在は内部の工事中である。二学期からは使用可能となるであろう。小体育館の改修工事も近々始まる予定であるが、ここ数年のうちに秋高キャンパスも面目を一新することになる。

六月中旬の学年PTA、合唱コンクール、七月下旬の学級対抗、九月の秋高祭と、学校の営みは続いてゆく。今後とも、同窓諸賢のご鞭撻ご声援をお願い申しあげます。

山谷浩二（S20）

事務局報

昭和五十五年十二月以降の会務を報告いたします。

55・12・6　鹿角支部総会
12・12　湯沢雄勝支部総会
12・12　百十周年校史委員会
12・15　秋高同窓会だより第11号発行
12・16　百十周年行事委員会
12・17　東北肥料羽城会総会
12・18　百十周年広報委員会
12・19　秋田市役所羽城会総会
12・19　百十周年名簿委員会
12・23　百十周年財政委員会
56・1・13　百十周年施設委員会
56・1・17　東北北支部総会　仙校舎改築期成同盟会
1・22　理事会
1・24　営林局支部総会
1・24　百十周年総務委員会
2・2　幹事・常任理事会
2・3　大館支部総会
2・27　秋高天上会総会
3・7　昭和56年同窓会入会式
3・22　八郎潟支部総会
4・16　百十周年総務委員会
56・4・30　百十周年財政・名簿合同委員会
5・9　学校林視察
5・23　百十周年年次募金・名簿委員会
5・27　昭和55年度会計監査
5・27　幹事・常任理事会
6・5　東京支部総会
6・20　仙北支部総会

本部同窓会**総会**が**八月十六日(日)**午後四時三十分より、アキタニューグランドホテルに於て開催されます。年次ごとに誘いあって、ひとりでも多く参加くださいますようご期待申しあげます。

天上天下

新棟も完成近く、大体育館の改修工事も近く始まろうとしている。改修工事とはいえ、当局のご配慮によりステージ（幅二五メートル・奥行四メートル）も付設され、また百十周年記念事業の一環としての柔道場も併設される予定である。校舎改築期成同盟の主張である全面改築ではないが、現実的に健康的で安全で機能的な教育環境が整備されてゆくことは期待できそうである。

今後数年の間、毎年毎年最善を尽くすことになろうが、全体的なスケールの大きい総合計画があまり明確でないのが気になる。その年暮らしで、全部完成した暁に後悔のホゾをかむようなことにならぬよう注意したいものである。

さて、秋高の校舎が一棟増築され体育館が改修されようとしているとき、その中で学ぶ生徒たちの生活に目を注いでもらうつもりで国語の時間に「秋高改革具体案」と題する作文を課してみた。

生徒は苦しんだらしい。中には「こんな乱暴な題で作文を書かせることを止めるべきだ」とか、「現在は理想的だと思うから改めるべきことが見つからない」などという意見が出たが、「入れ物だけ良くなって中味が旧態依然では意味がない。理想の高い青年は決して現状に満足しない。秋高を愛するならば改革すべき点はいくらでもあるはずだ」と説得したのである。

現在、大問題や小問題、いろんな改革具体案が集まりつつある。全部出そろったら、項目別に分類し、立派な表紙をつけ綴じこみ、図書館に置いて、末長く後輩諸君に読んでもらうつもりである。

今年は創立百八年目である。秋高は新しい世紀に突入しているのである。その長い歴史の中に培われたものは各時代の生徒に脈々と伝えられてきた。その中の一つは生徒たちの内部から生れる自浄作用であると思う。我々同窓生は母校の教育環境の万全を期待するとともに、その中にある生徒たちの生活をあたたかくきびしく見守っていきたいと思う。

▽出席者
後列右より
加藤昭典、渡辺佳則、富塚清一
前列右より
加賀谷辰雄、松原先生、山谷浩二
▽場　所　川寿

つどい

昭和五十六年度 東京支部総会

○とき　六月五日(金)六時半
○ところ　池袋東武十一階
会場はお馴染の東部バンケットホール。定刻より一時間以上も前から駆けつける会員も多く、ホール前のロビーには高らかな秋田弁の談笑があふれる。なつかしい〝秋田の夕べ〟の開幕が待ち切れない気持ちがだれにもあるのであろう。みんなに待たれる総会なのである。

定刻。金谷勇支部長、あいさつに続いて、55年度決算、56年度予算につき報告、拍手で承認。

本部から花岡泰雲副会長（昭5）のあいさつ。百十周年記念事業の説明と母校野球部の活動状況について。

一関吉美教諭（昭14）から母校の現況報告。

沢石謙広報委員長（昭12）は特に百十周年記念事業のための一億円募金の趣旨を強調、ご協力を願った。

根布谷豪本部事務局員（昭46）は、同窓会だよりの広告につき報告、東京支部の強いご協力に感謝した。

出席者は大正9年卒から昭和48年卒まで51名。同期生の消息、先輩後輩の活躍の情報などが交換されてまことに活気に満ち、メートルも上りっぱなし。中でも大正期の大先輩たちの母校を思う純粋な熱情は後輩の胸を打つものがあった。

母校野球部の活躍を期待する佐宗金太郎応援団長（大12）は「選手だけの試合ではない」と一般生徒、同窓会員、教師の奮起を要望し、一同起立、応援歌、校歌を高唱して、余韻さめやらぬまま幕となったのである。

昭六会五十周年同級会

○とき　五十六年六月六日
○ところ　野田牧場及びあきたくらぶ

昭和六年組は今年で卒業五十周年を迎え、記念祝賀同級会を開催した。

当日は県内外から約四十人の同級生が秋田駅前に集まり、午後二時貸切バスで太平の野田牧場へ向う。五十年ぶりで会う久しい顔も多い。七十歳に間近い年を迎えてなお紅顔の日の面ざしを残しているもの、なかなか昔の思い出がよみがえって来ない顔などさまざまだが、互いに激動の半世紀をそれぞれに生き抜いてきた感慨を胸に、再会の喜びはひとしお深かった。

野田牧場は級友故鈴木一君が政界活動のかたわら、北方農業の研究と実践をめざして、営々と情熱を注いだところ。八重子未亡人と次男孝雄さんに迎えられて鈴木君追慕の碑にお参りし在りし日の同君を偲んだ。快晴の太平山を仰いで記念撮影、小憩の後再びバスで母校に向う。昔に変わる近代的な校舎や秋田市街を車窓から眺め、「浦島太郎のような気持だ」と、隔世の感に打たれている県外からの級友もいる。

五時前、祝賀会場「あきたくらぶ」に到着。やがて、幹事代表近藤英夫君と県外参加者代表大山正君のあいさつがあって、他界した同級生七十五人の名を読みあげて黙禱を捧げる。遠く広島県呉市から出席の大山良一君の乾杯の音頭で開宴。酒が入っていよいよ懐旧の情がまし、互いにひざを交えて思い出話が尽きることなく続く。初夏の夕べを心ゆくまで語り合うちに、やがて校歌「天上はるかに……」を元気いっぱい斉唱、万歳三唱してまた会う日を固く約束し、八時散会した。

▽出席者（五十音順）
（東京方面在住者）
阿部民弥、池田静一、大山正、工藤勝郎、佐藤量寿、進藤末治、谷藤正三、乳井良一郎、早川五郎、的場正哉、三沢太吉。
（呉市在住者）
大山良一。
（県内在住者）
浅田重夫、枝川慶政、遠藤三郎、落合喜久郎、柿崎長蔵、金山和義、佐々木令章、佐藤豊吉、菅原作衛、渋谷耕一、武田基、豊口甚平、内藤憲太郎、中安正衛、船木兼治、松渕悌逸、松本修二、村上資郎、明珍吉雄、森田忠雄。
（幹事）
阿部武次、岡正三郎、鎌田民治郎、近藤英夫、島田洋治、武藤理市郎、森一。

（写真は野田牧場、鈴木一君追慕の碑前で）

第十七回天上会総会

○とき　56・2・27
○ところ　如斯亭

天上会というのは、秋中・秋高OBで現在母校に勤務する職員と本校在職十五年以上の先生並びに学校長の特別会員から成立する会で年に一回位同窓会幹部役員を招待して親同窓会と交流・連絡を密にし、且つ会員相互の親睦をはかるのが目的である。現在会員四十八名である。

会は神田勉当番幹事の開会のことばで始った。一関代表からは秋高の新たなる世紀に向って一同頑張りたい旨ご挨拶があった。秋山新校長からは、会員が〝母校〟に溺れることなく努力してもらいたいという激励と戒めの言葉をいただいた。花岡同窓会副会長からは、来る昭和五十八年の創立百十周年の同窓会記念事業の概要が発表された。次いで山谷会員の乾杯の音頭で懇親の宴が盛大に開かれた。

矢留昼食会 百五十回記念 能代支部

六月十九日、能代支部矢留昼食会が前柳谷市長、西村市長さんをはじめ十五名の会員で盛大に宮茂登で開かれました。この会は昭和四十年から行われ毎月第二木曜日に開かれ今回で百五十会となりました。くしくも母校野球部が能代選抜大会に出場中であり選手の激励会をも兼ねて行われました。皆様ふるって参加ください。

大曲仙北支部総会

復活三〇回目の大会が去る六月二十日大曲市料亭対川閣に於て開催された。本部より花岡泰雲副会長、母校より山谷造二先生、事務局より根布谷豪主事が出席された。伊藤恭五郎支部長が昭和二十九年六月当時の仙北地方事務所長佐藤真之助氏の肝入で、復活してから三〇回を迎え得たことを喜び、支部の発展に功あった。

佐藤真之助、鈴木八郎治、加藤芳男、故一星邦輔、の四氏を讃え感謝状、記念品を贈った。花岡副会長が母校創立百十周年の記念事業、行事について、山谷教諭より母校の進学状況、運動部関係の成績の話があって記念撮影懇親会にうつり、会員酒造業者寄贈の銘酒を酌みかわし大いに親睦を深め、最後に校歌、校友会歌を声高らかに歌って散会した。

◆出席者次の通り
T12小笠原俊一郎、S2木下孝、S7伊藤恭五郎、鈴木良助、伊藤四郎、小山田宜雄、S8佐々木長八、S9鈴木光太郎、S10加藤市郎、加藤芳男、S11高橋政奈、S16小松正一、武田賢亮、S20根本幸蔵、S22加沢敏郁、S23佐藤輝男、S27加藤主税、S28佐藤公昭、S29有明秀太郎、S30斎藤正俊、寺田昭士、佐々木晃、S31伊藤圭右エ門、高柳恭侑、滑川五郎、茂木晃、S34辻久男、S38山本美幸、S40一星邦彦。

東京支部幹事　☎03—971—6021

金谷勇（T15卒）　土井栄治（T9卒）　佐藤文雄（T12卒）　佐宗金太郎（T12卒）　吉成一郎（T13卒）　高橋平八郎（T13卒）　伊藤勝三（T14卒）　加賀谷篤一郎（T15卒）　木村元治（S2卒）　大山正（S6卒）　浦川直樹（S7卒）　今行雄（S11卒）　石橋武雄（S14卒）　朝倉俊夫（S26卒）　三田茂（S26卒）　高橋恒雄（S27卒）　大賀三（S28卒）　加藤啓功（S30卒）

兼坂商事株式会社　取締役社長　兼坂信義（S7卒）　東京都渋谷区神宮前五—六—八　TEL〇三—四〇〇—五三七五

(財)愛世会愛誠病院　副院長　菊池由夫（S23卒）　自宅　東京都練馬区氷川台四—五一—七

日本メディイコム(株)　専務取締役　長谷川阿佐夫（S23卒）　自宅　東京都北区東十条三ノ一〇　会社　東京都千代田区外神田六—五—三

たかはし法律事務所　弁護士　高橋恒雄（S27卒）　自宅　東京都杉並区高井戸西一—四—一二　事務所　東京都中央区銀座四—一二—一六　村井ビル一八七七　TEL〇三—五四三—

画家　佐藤文雄（T12卒）　〒一六八　東京都杉並区久我山五ノ二四ノ三一　TEL（三三四）六四〇五

東電広告株式会社　取締役社長　信太不二雄（S4卒）　東京都渋谷区神泉22—2

社会福祉法人恩賜財団愛育会　理事長　大山正（S6卒）　東京都世田谷区上祖師谷二ノ三三ノ二〇

大賀株式会社　取締役社長　大賀啓三（S28卒）
事業内容
キングタイガー、シーザー、ヘンリー、ニューバリー、ジュリアス等ナショナルグランドおよび大丸トロージャン、西武のデッドラヒドス、三越のオスカーテラレンタ、そごうのロージェント等全国有名百貨店の紳士服製造・販売
紳士服の K キングタイガー/大賀株式会社

秋田中学4年卒 35周年記念同期会

○とき　55・11・22
○ところ　みずほ苑

人間の集団には色々なタイプがあるらしい。我々同期の集団は、綿密な計画をたてて事を実行するのはやや不得手な人達が多いようだ。今回もやや唐突に、記念の会を持とうということになった。期日も切迫しているので、あたふたと案内状を発送（高松氏の協力）する。発信人が県庁地方課ということで事情を知らない人達は開封するまで何事かとゞうことで、びっくりしたらしい。

しかしそこは同期生の誼、遠く北海道から松淵清次郎君、東京から三浦和夫君、弘前から菅原光雄君が恐らく一別以来初めてではないかと思うが馳せ参んじてくれた。そのうち群馬太田、中島飛行機に行こうということになった。

昭和九年卒 尚久会

○とき　昭和55・12・6
○ところ　秋田市栄太楼旅館

毎年開催している、私達の尚久会は、斎藤鉉吉君の黄綬褒章、大守崇男君の文化章受賞をお祝いし、山下四郎先生をお迎えし、忘年会を兼ねて開催しました。

卒業以来の樋渡忠治君、久方振りの成田重右エ門君、加賀谷力司君等を加え、二十名の会合となりました。

最初に卦報の佐藤長雄君（S55、1、4）小野崎心一君（S55、2、29）に黙とうを捧げ、小国会長より、受章者の両氏にお祝いの言葉を兼ねてのあいさつ、次いで山下先生、斎藤、大守、樋渡、今村の各氏よりのあいさつと続き、工藤君の音頭で「秋田の酒で、乾杯」懇親に入りました。

忘年会を兼ねてとのことで、宴が進むにつれて、隠芸も出る始末、最後に、校歌、応援歌の大合唱となり、来年も、必ず元気で再会することを約し、三々五々、二次会へと……。

◆出席者
山下四郎先生、樋渡忠治、斎藤鉉吉、加賀谷力司、鎌田善美、大守崇男、今村久悦、成田重右エ門、花岡為雄、工藤武雄、佐藤漸、加賀谷厳治、佐々木清一、石川孫左エ門、沓沢春雄、清水高典、平沢恒治、宇佐美礼治、小国敬三郎、黒沢信夫。（順不同敬称略）

追記、会員の佐藤博君、（56、2、4）死亡。
（黒沢　記）

昭和九年卒 在京尚久会

○とき　昭和56、1、23
○ところ　東京・新宿　みずほ荘

秋田に遠い私達が在京及び近郊の方々と、懐旧の念、断ちがたく前記の如く開催しました。寒い時期ではありましたが、十四名の出席となりました。

懇親会は、談笑裡に進み、白とハゲがもつれ合い、時の過ぎるのも忘れて飲み、語り校歌、応援歌を合唱して散会しました。

◆出席者
佐藤　博、古野徳治、蓼沼八郎、鈴木慶悦、高宮三四五郎、那波順二、長瀬篤雄、佐々木久勝、長岑正次、谷口周造、藤原茂正、多奈部礼次郎、田口良一郎、荒沢信三郎。（順不同敬称略）

追記、この会に出席後、佐藤博君がS56、2、4　他界されました。
（荒沢　記）

お願い

○〝つどい〟の原稿を待っています。年次・支部、時・所を明記し、文章はなるべく簡潔に書いてください。写真は（出来れば）白黒がハッキリしますのでよろしく。

○慶弔はもちろんですが、恩師・会員のニュース、大小にかかわらず、ご一報くだされば幸甚です。
（編集係）

秋田高校昭和27年卒同期会開く

○とき　四月十八日
○ところ　秋田第一ホテル

◆ご出席の恩師
花岡秦雲（同窓会副会長）。
鈴木勝三郎、三浦鉄郎、中山健、深井博之、山谷浩二、以上六名の諸先生。

◆幹事　十條パルプ

むかいの千秋公園の桜のつぼみもふくらみはじめた十八日、午後五時から記念写真の撮影をかわきりに、伊藤（礼）幹事の司会で昭和二十七年卒同期会が諸先生をおむかえして開かれた。

花岡同窓会副会長の母校百十周年記念行事への要請あいさつ、鈴木先生の近況と思い出、山谷先生の学校の近況のご報告などがあり酒宴に入った。

遠くは浜松市、福島市や八戸市からはせ参じた諸氏をまじえ出席者は七十名をこえ、話ははずむ。

思えば、終戦翌年の昭和二十一年四月、旧制中学最後の生徒として、学校焼失のため中通小学校で入学式をし、旭南小学校へ二部授業で午後から通学した。昭和二十四年、兵舎あとの校舎へ百名の同期生をむかえ、昭和二十七年三月、秋田南高校第四期生として卒業してから来年で三十年になろうとしている。

懇談の中で、三十周年記念行事のための幹事の提案がなされ在市、職場、県内地域から若干名の幹事が出て記念行事の案をねることになった。

バックミュージックのエレクトーンに合わせて、カラオケならぬ「ウタ」や話がはずめば、酒量もまし、幹事があわてる一幕も。

校歌、応援歌合唱のあと、来年の三十周年行事、さ来年の母校百十周年行事の成功と、来年の同期会へは同期生をさそい合って、多数出席するよう誓い合って、タクシースト中の街へ散会した。

季刊誌「北域」
北域社
小林定静
（S2卒）
秋田県角館町　TEL3—2683

大里病院
大里文祐（T10卒）
大里祐一（S29卒）
鹿角市花輪堰向19

錦木・鹿角
花正宗・常勝
㈲関善酒店
関善次郎（T2卒）
関善一（S11卒）
鹿角市花輪
☎01862—3—2021～4

株式会社ホテル滝の湯
取締役社長
山口政昭（S20卒）
鹿角市八幡平字湯瀬湯端一六
TEL〇一八六三—二—二三三一

省エネ産業で世界へ翔く
株式会社サーマル
社長
二木亮（S27卒）
工業炉・熱処理炉・電子工業用セラミック
本社：東京都板橋区大山東町38—8　☎962—4011
営業所：大阪・名古屋・福島・台北　工場：川越・台湾・福島

鹿角市長
阿部新（S12卒）
鹿角市
TEL（〇一八六）二三—二五六七

鹿角信用組合
専務理事
大里三彦（S13卒）
鹿角市花輪字荒屋敷一四四—一
TEL（〇一八六）二三—二〇一四

桧木内製材有限会社
有限会社角館桜皮細工センター
代表取締役
田口宗良（S33卒）
角館町中町25
TEL 01875—3—2638

田鉄電器株式会社
代表取締役
小林大蔵（S34卒）
秋田県角館町岩瀬町三一六
TEL〇一八七五—三—二三四六

小泉医院
小泉五郎（T13卒）
小泉金次郎（S29卒）
秋田県能代市富町八番十二号
TEL〇一八五五—二—二四二七

男鹿市議会議長
目黒晃治郎（S4卒）
男鹿市男鹿中滝川

昭和十三年卒(第51回)同期会

秋田県在住者の集い

○とき　55・11・29(土)
○ところ　みづほ苑

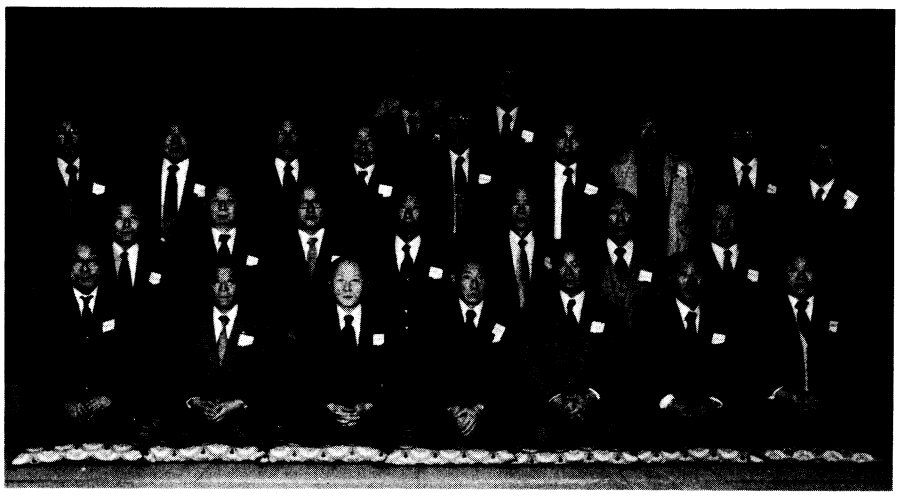
昭和53年9月卒業四十周年を記念して五年振りに同期会を開催した折に、二年に一回ぐらいは、みんなで顔を合わせる機会を持ったらという声が多くあったものの、現存同期生の半数以上が県外ということもあって具体化しなかったが、せめて県内在住者だけでもということで、二年振りに同期会開催の運びとなった。

当日は新装なった秋田市「みづほ苑」に二十六名が出席、開会の前に記念撮影を済ませ、菅原繁雄幹事の軽快な司会進行のもと、石田秀一世話人代表の挨拶、会務報告のあと、毎年12月の第一土曜日に開催している「秋中51回生東京クラス会(第十一回)」の案内状の紹介があり、引続いて今はなき学友の御霊に一分間の黙禱を奉げてセレモニーを終了。恒例の懇親会は、高安泰助幹事の発声で乾杯、開宴となった。今回は小松義一・金沢彪・森山勇一郎の三君が、はじめてあるいは久振りに参加したこともあって懐かしさもひとしおで、会は大いに盛り上がりをみせた。その間参加者全員がそれぞれ近況を報告したが、どの顔も還暦を迎えた人とは思えない程みんな元気で若々しい。

くしくも前回のときと同じメンバーの川反綺麗どころのお酌で、ピッチもぐんぐんあがり、時の経つのも忘れて、語り合うほどに酔うほどに、いつとはなしに車座になって賑やかに談笑、同期会ならではの雰囲気となった。最後に全員起立して声高らかに校歌を合唱、お互い健康で、又の再会を約してお開きとなり、二次会へと散っていった。

▽当日の出席者(五十音順)
安藤勝雄、石田秀一、泉富士男、伊藤市郎、江見喜代彦、大槻家静、金沢彪、工藤千代松、小嶋敏夫、小松義一、小松真悦、坂本光彦、柴田吟一、進藤一雄、菅原繁雄、鈴木哲郎、高橋秋男、高安泰助、畑沢　恵、平野庫治、藤原敏雄、三浦弘信、宮崎金一、森山勇一郎、横江剛一、若狭金治。

(K・O　記)



本荘支部総会

○とき　55・11・22
○ところ　本荘グランドホテル

十一月下旬としては穏やかな天候のもと、母校から山下教頭、事務局から根布谷氏を迎えて開催された。まづ、堀支部長による記念撮影、続いて今野幹事の司会で開会となり、支部長が、今年より由利・鳥海支部が独立したため、参加人数が減ったこと、秋高百十周年を成功させるため協力してゆくこと、中高生の非行問題には会員として努力してゆこうとあいさつ。山下教頭より、秋高の現状、進学率、運動部の活躍、校舎改築、百十周年について話された。そして斎藤幹事長から会務報告がなされ議事を終了した。

懇親会では、自己紹介、25年卒同期会会歌「こんな男になりました」の全員合唱など、これぞ秋高同窓会という和気あいあいの雰囲気のなか散会となった。

『S四十二卒全員集合しょう』

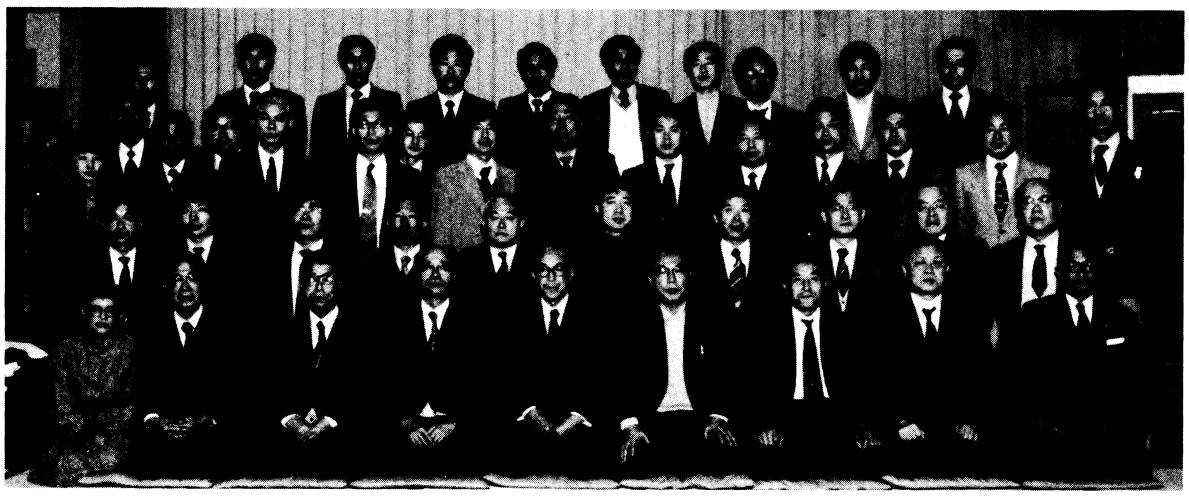
秋高昭和四十二年卒業生は来年卒業後十五年になります。今年はその子行練習として全員参加を目標に思い出に花を咲かせたいと思いますので、四十二年卒同期生は全員集合しよう。

▽場所　『杉のや』
▽日時　八月十四日(金)　午後五時
▽会費　五千円

※なお、当日の午前の部はゴルフを計画しております。
詳しい事は鎌田専務まで。
(TEL三二―二一五五)

大館支部総会

○とき　56・2・3
○ところ　北秋クラブ
参加者　本部より　大嶋民治　同窓会副会長　山下三喜男　教頭　大久保正樹　職員　地元在住の旧恩師　多数。



第9回26年卒同期会関東地区総会開催報告

三月十四日銀座「武鮨」において二十九名出席のもとに盛大に開催された。特に菅原君(四国から)春日井君(青森から)、清水君(名古屋から)、桑原君(仙台から)など遠路参加があった。なお辻君(秋田)からの連絡によると、三十周年記年同期会をこの秋頃に開催する計画があるやに聞いている。当地区会から一人でも多く参加し旧交、友情を深めたいと思う。

同窓会・支部一覧

1　東京支部
支部長　金谷　勇(T15)
〒171　豊島区南池袋四丁目14―1

2　近畿支部
支部長　神田孝一(T13)
〒662　西宮市南越木岩町4―6

3　仙台支部
支部長　菅原晃一(S13)
〒981―01　宮城県宮城郡利府町神谷沢字南沢1―28

4　札幌支部
支部長　河田啓一郎(S20)
〒001　札幌市北区北24条西13丁

〈県内〉

5　鹿角支部
支部長　大里文祐(T10)
〒018―52　鹿角市花輪堰向19

6　大館支部
支部長　奥山　広(S15)
〒017　大館市東台81―9

7　鷹巣・阿仁支部
支部長　九嶋賢三(T8)
〒018―33　北秋田郡鷹巣町北塚岱

8　能代・山本支部
支部長　松野朝造(M45)
〒016　能代市大手町4―4

9　五城目支部
支部長　今村久吉郎(T10)
〒018―17　南秋田郡五城目町下夕町191

10　羽城矢留会
支部長　門馬秀夫(S4)
〒018―14　南秋田郡昭和町虻川境1

11　八郎潟支部
支部長　相馬徳治(T14)
〒018―16　南秋田郡八郎潟町中島195

12　男鹿支部
支部長　村上光彦(S3)
〒010―05　男鹿市船川港栄町56

13　本荘支部
支部長　堀　稔(S10)
〒015　本荘市谷地町20

14　矢島・鳥海支部
支部長　佐藤久夫(S8)
〒019―18　仙北郡南外村及位134

15　大曲・仙北支部
支部長　伊藤恭五郎(S7)
〒014―03　仙北郡角館町大塚

16　北仙北(角館)支部
支部長　西宮圭次(T3)
〒019―14　仙北郡六郷町馬町41

17　東仙北(六郷)支部
支部長　小西松治郎(T13)
〒013　横手市中央町2―14

18　横手・平鹿支部
支部長　和賀義雄(S12)

19　湯沢・雄勝支部
支部長　奥山信吾(S3)

〈秋田市内職場支部〉
秋田県庁・秋田市役所・秋田営林局・東北肥料・農協五連・十条製紙・東北電力・秋田銀行・羽後銀行・秋田鉄道管理局・秋田魁新報社・土崎汀友会・秋田相互銀行。

東海林医院
東海林　博(S29卒)
由利郡大内町岩谷町字日渡二四五
TEL　〇一八四六―五―二〇〇五
〇一八四六―五―三〇〇八

料亭　對川閣
加藤芳男(S10卒)
大曲市丸の内六―二一八
TEL二一〇三六九・三―六六三三

三長園
三村一雄(S16卒)
大曲市上大町十一の七
TEL二―〇〇一〇

有明医院
有明良雄(S20卒)
大曲市須和町一丁目二―三一
TEL〇一八七六―三―〇一〇一

株式会社フジタ
代表取締役社長
藤田紀一(S23卒)
大曲市中通町一〇―三
TEL〇一八七六―三―〇六〇一(代)

仙北報知社
代表
佐藤輝男(S23卒)
大曲市金谷町二三―二九
TEL〇一八七六―二―一二八二

下山胃腸科内科医院
下山維敏(S30卒)
大曲市福住町二番二三号
TEL〇一八七六―三―五一二〇

株式会社　仙北印刷所
専務取締役
佐藤元一(S33卒)
大曲市栄町十―二四
TEL三―二一二二

手づくりのふるさと
とうふ・かまぼこ
三杯もち製造販売
つじや
辻久男(S34卒)
大曲市中通町七　一四

(株)タカヤナギ
専務取締役
高柳恭侑(S35卒)
大曲市白金町五―七
TEL三―二五六七

(株)秋田銀行仙台支店
支店長
林崇(S22卒)
山本博英(S35卒)
駒野美智雄(S40卒)
岡田喜秋(S41卒)
斎藤進(S46卒)
知久誠(S49卒)
佐藤金久(S51卒)

(株)羽後銀行仙台支店
佐藤忍(S37卒)
岩見登志久(S49卒)

(株)秋田相互銀行仙台支店
支店長
金子忠夫(S27卒)
桜田裕之(S49卒)

秋田営林局支部総会

○とき　56・1・24（土）
○ところ　ニューたけや

総会は佐藤新吉氏（S23）を座長に選出して進められました。高畑幹穂会長（S20）による開会のあいさつがあって議題に入り、事務報告、55年度決算報告、56年度予算案が審議されて満場一致で承認され、役員改選では次の各氏が選出されました。

会　長　高畑幹穂（S20）再
副会長　加賀谷時雄（S21）再
〃　佐藤新吉（S23）新
事務局長　鈴木庄吉（S37）新

写真撮影を終えて懇親会場に移り、全員で校歌斉唱のあと来賓の方々を紹介し、高畑会長が開宴のあいさつをしました。

つづいて来賓の当局平田昭彦総務部長から本会の発展と会員の活躍を期待するあいさつがあり、秋山光雄校長先生から進学状況を通じて学校の近況を、花岡泰雲同窓会副会長からは運動部の活動状況と同窓会の動向について、また、当会OBの宇梶正氏（S14）からあいさつがありました。来賓各位の有意義なあいさつが済んだところで、久々に参加された当会OBの鈴木政夫氏（S5）の音頭で乾杯し懇親会に入りました。

本会の総会は長年の間十二月第一土曜日開催ということで定着していましたが、現場の都合等から開催時期を変えてみようということで、一月下旬に変更したのが幸いしたのか例年になく参加者が多く、特に現場第一線の営林署からの参加者が多かったのが印象的でした。同じ職場とはいっても、秋田、山形両県の局署に勤務する会員が一堂に会することは年に一度のことであるため、旧交を温める絶好の機会と時の過ぐるのも忘れて語り合うなど終始なごやかに進められました。

最後に、本会の応援団長こと長谷川肇氏（S28）の拍子で「鳥海の高嶺……」を全員で合唱して盛会裡のうちに閉会しました。

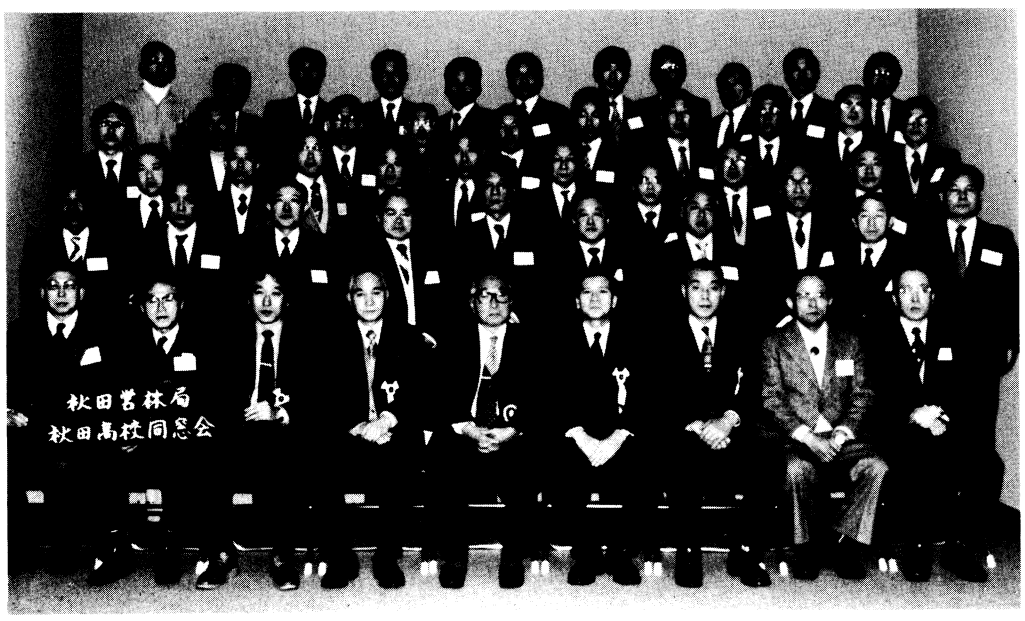
◎出席者

○来賓
秋山光雄　校長
花岡泰雲　同窓会副会長
根布谷豪　同窓会事務局員
平田昭彦　営林局総務部長
蛇川公大　営林局経営部長

○本会OB
鈴木政夫（S5）宇梶　正（S14）
根岸秀治（S18）、板倉貞一（S26）

○会　員
高山　実、斎藤久市、川村剛（S18）、高畑幹穂、清水和夫（S20）、九嶋廣政、加賀谷時雄、国安彰（S21）、北島啓一（S22）、原田亮吉、佐藤新吉、加藤富喜夫、石塚元彦（S23）、藤本　弘、進藤日出夫（S24）、宮野　功、高橋和美、遠藤隆三（S25）、田村昭夫、一関挺進、藝沼良一、石川光雄、有明孝一郎（S26）、田中勇三、菊地隆三（S27）、熊谷　弘、越前栄二、高田屋栄一、宮田富雄、見上昭太郎、小貫勇治郎、長谷川肇、戸祭　実、雑賀光一（S28）、佐々木錞吉、佐藤康也（S29）、三浦正利、児玉　実（S30）、木曾晃哉、渡辺鋼一、佐々木昇一（S32）、吹浦忠允（S33）、藤峯一男、渋谷邦夫（S34）、佐藤　昭（S35）、大山留治、落合淳一（S36）、鈴木庄吉（S37）。

以上



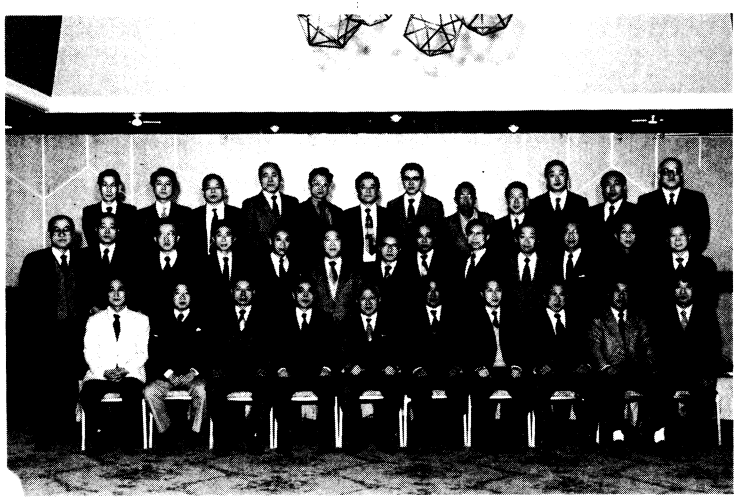
"二八会"例会（昭28卒）

○とき　56・1・10
○ところ　第一ホテル

我々の同期は、毎年、一月第一土曜日に例会を持っている。

今年度の出席者は次の通り。

前列左から、佐藤哲也、中山文夫、池田信男、深井先生、吉井先生、湊　真正、小林敏昭、高坂英夫、小畑次郎。

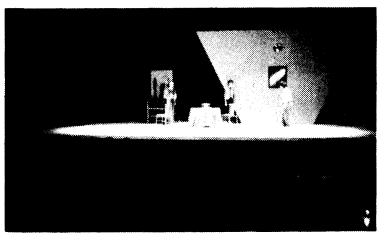


中列、岩田次夫、内藤　徹、大田稔、高橋信昭、鎌田史郎、東海林信一、鈴木文夫、三浦利治、藤井鉄雄、夏井重幸、和田　紀。

後列、島津寿一、小林忠雄、伊藤　埠、石川　実、鎌田洋悦、石川　実、小笠原康友、早川宏道、土田　襄、小川省吾、笹村健明、新林　誠。

演劇部初の全国大会に出場す

第五回全国高校総合文化祭秋田大会開かる



「文化活動のインターハイ」と呼ばれる第五回全国高校総合文化祭が秋田市の県民会館、市文化会館、県立体育館などを会場に、七月二十九日（水）「総合開会式」を皮切りに五日間の日程で開幕する。演劇、合唱、吹奏楽、マーチングバンド及びバトントワーリング、絵画、写真、書道、郷土芸能など十部門にわたる発表会、展覧会が行われるが、本校からも絵画部、写真部、書道部が出品するほか、ブラスバンド部が七月三十日（木）マーチングバンド・バトントワーリング部会（会場県立体育館）のステージ演奏をする。

また昨年全県初の最優秀賞に輝いた演劇部は、二月の東北大会を経て一段を磨きをかけ、初出場ながら上位入賞を狙っている。上演作は昨年と同じF・アラバールの「二人の死刑執行人」―第二次大戦中悪夢と覚醒の間からこの世に生れ出た作家が、自由への闘いのために、すべて束縛するもの、制裁を加えるもの、抑制するもの、押さえつけるもの、みにくくするもの、尋問するもの、処刑するもの、去勢するものに対して激越に告発する一連の作品中のもの。異様性は舞台装置にまで表れ、ともすれば平穏な日常性に埋没しがちな私たちに「自由」とのかかわりに於ける人間存在の深淵を覗かせる。

難解な作品だけに、本校演劇部がかなりの時（一年前一度上演して不十分不満足な舞台になる）をかけて暖め、確かな作品理解のもとに舞台に形象化した。この七月十五日（水）から十八日（土）まで三泊四日の強化合宿を通して最後の調整を行い、いよいよ八月一日（土）十時五十分より一時間上演する。作品を通して、本校生の持ち味を充分に発揮し、第五回全国高校総合文化祭秋田大会の有終の美を飾ることを期待するものである。

（田口　記）

秋中思い出草　補遺①

高山重雄（昭5～28）

「だより」7号から10号まで連載、好評を博した"秋中思い出草"は、未発表分を加えて、昨年六月に刊行された。これも部数が少いので、読みたくても読めない会員が多い。そこで「だより」に載らなかったお話を収録して、会員諸兄の渇をいやしていただくことにした。

（係）

二十三　小田嶋次郎氏（S15―S29）、俳人、作曲家としての名は樹人、仇名は老人（ジッコ）、又はバネ（は又とないお人良し、天真爛漫、いくら年を取っても童心を失わない稀に見る善人でした。若い頃中山晋平氏と共に作曲に専念したという傑作の一つ「ヤットコ、ヤットコ、くり出した……」という子供の歌は全世界に知られた名曲だと自慢していた。親子程年の違う私と妙に気が合って長い付合いだが、その切掛けが、面白い、彼が赴任して間もなく、何かを祝う（何であったか忘れた）旗行列から期せずして抜け出した二人、稲福に入った。呑兵エの私も甘党だから甘党の彼に付き合った。その時、酒の上での話なら当り前かも知れないが、お汁粉を食べながらの話だから呆れる。「君、女コが好きか？」と来た。驚きましたねえこれには。嫌いでもないから好きだと答えたら、我が意を得たりと満足そうな顔で「そうだろう、俺も大好きだ。アハハ」お互い正直な男と判って、これから深く交際する事とは相成った。

二十四　十八年の夏、能代までの大行軍の途中、小休止していた時、小田嶋老は四、五名の先生達の居る所で何の遠慮もなく勢よく一発大きなのを放った。とたんにある先生曰く「先生、今の音は？」泰然として少しも騒がず「（調）と答える。すかさず又一人「（長調ですね」と云えば「その通り」とケロリとして御座る。大笑いで疲れも吹飛んだ。そしてあの暑い中を御老人涼しい顔をして歩き出した。

樹人老、年に似合わず元気一杯、バネの利いた足取りも軽く大行軍を続け、歩き通した。歩きながらあのガスの大噴射が続いたらよい推進力になっただろうな。大気汚染もひどかっただろうが

二十七　私が赴任して間もなく度胆を抜かれたのは、異材、剣道の榊田栄治氏（T12～S15）であった。市内を散歩していた時彼に会った。軽く会釈して去ろうとしたら突然私にしがみついて片手で腹を押さえ「ウーム、痛い、ウーム」と油汗をたらして苦しみ出した。驚いて医者をと云ったが、いらないと云って四、五分も苦しんで、収ったと見えちゃんと立ち直り、「いや、どうも失礼」と云って又ステッキを振り振り悠然と去って行った。アッケに取られた私はしばし呆然としていた。時々起こる彼の持病だと後に判った。

東北通信建設株式会社
取締役
奥山熊雄（S13卒）
仙台市東七番丁一一三
TEL九七―五〇六〇

小松内科
院長
小松誠（S13卒）
仙台市鶴ヶ谷団地中央入口
TEL〇二二―五二―〇三一一

ドイツ銘醸ワインの店
バッハインターナショナル
東北地区総発売元
フレンドリィ ふじい
秋田市手形新栄町7―24
TEL32―2779

山王耳鼻科医院
院長
村上君之助（S4卒）
秋田市山王2―1―4

松橋内科・婦人科医院
松橋周三（S4卒）
秋田市旭南三丁目三―九
TEL〇一八八―六二―四四四五

秋田商工会議所会頭
松本修二（S6卒）

秋田電機建設株式会社
取締役社長
近藤英夫（S6卒）

秋田テレビ株式会社
代表取締役社長
中安正衛（S6卒）
秋田市八橋字一里塚二一六番地
TEL二四―四一四一

清酒
秋田山
菊地鶴松（S14卒）
菊地永太郎（S47卒）

医療法人惇慧会
勝平中央病院
理事長
院長
穂積惇（S14卒）
秋田市新屋町割山一八七の三
TEL二三―六二六六(代)

秋田ドラム工業株式会社
代表取締役社長
銭谷象二郎（S14卒）

秋田自動車部品商会
越後谷至（S14卒）

三傳商事株式会社
専務取締役
三浦禮三（S14卒）
秋田市大町一丁目三番八号

羽後銀行
取締役
本店営業部長
千田達彦（S20卒）
秋田市中通三丁目一―四一
TEL〇一八八―三三―四二二一(代)

〝霊泉〟訃訪富多大先輩を弔う

秋田高校同窓会
鹿角支部長　大里文祐

最近お会いする機会がなく、御入院なされたことも全然知らず、急にお亡くなりなされと聞き、間違いであってほしいと祈りながら、大湯の小笠原医師に電話しましたところ事実であることがわかり、残念で残念でたまりませんでした。あなたは、明治三十九年に秋田県立秋田中学校に、入学されて何年生の時かはっきりしませんが、東京郁文館中学校に転校され卒業して金沢の旧制第四高等学校を経て、東京帝大哲学科を明治四十三年に卒業された。当時有名だった井上哲次郎教授に師事し、後継者に目されながら研究に励まれたと聞いております。しかし好事魔多しの例えも悲しく御父上様が四十年九月にお亡くなりなされて居られるので、教室に残って研究なさる事も出来ず、卒業後帰郷された。

当時の農民（大部分は小作人）の生活を目のあたりにして、あなたの若い理想に燃える血はこれではいけないと煮滾ったのではないでしょうか。それがあなたを郷土の開発に全力を捧げられた原因ではないでしょうか。

大正三年多額の自費を投じて、大湯国有林開墾事業に取り組み、大清水開墾を完成させ、大正十年大湯・鈴木・柴平の三ヶ村耕地整理組合長として、中通台地約三〇〇町歩の耕地整理を推進され、大湯温泉の発展を目差して大湯ホテルを建設し、陶工を招いて「大湯焼」を創始するとともに、鳴子こけしの小松五平に「大湯五平こけし」を製作させ、また昭和二十四年北奥羽開発協議会を結成し、大館八戸線の国道昇格運動を主唱し国道一〇四号線実現を図り、地域産業の振興に寄与なさいました。昭和二十二年より四年間大湯町長の要職に就任せられ戦後の混乱期の自治の立直しに尽力下さいました。

この外中通台地の耕地整理中に大湯環状列石を発見、大湯郷土研究会を結成、会長となりストーンサークルの発掘保存に取り組み、研究者の便を図るとともにまだ解明されていない十和田高原キリスト遺跡、戸来のキリストの墓、トッコの森の古代文字の解明等々あなたでなければ出来ない多くの問題が残っております。あなたの未発表の原稿もかなりの量になっていると聞いております。私はこの原稿の中に何かしら色々の問題を解く鍵があるような気がしてなりません。何しろあなたの御研究はあなたの夢と同じで、他人の追随を許さないものであわれわれの力では大変だと思いますが、郷土を挙げてあるいは専門家に依頼して解明に努力し、あなたに安心していただけるよう覚悟しております。

主治医の小笠原達医師から後で詳しく伺った事ですが、初診は四月七日で往診の依頼があったそうです。（何時でも御病気の時は小笠原君が診療しておられたそうです）小笠原医師が伺ってかなり衰弱しておられるように思われたので、入院をおすすめしたそうですが、「今は色々忙しいので、入院出来ない」とお断りになり、採血採尿して一応全身の診察を行い帰院後検査の結果診断は低蛋白血症、低血色素性貧血、慢性腎炎、腹部動脈瘤（疑）が気になるので毎日往診して点滴など行い、入院をおすすめしたが、「今、片付けなければいけない事があるから」とお断りになり意識ははっきりして居られたそうだ。四月十七日やっと入院されたが、意識は明瞭で見舞客の顔なども間違うことなく親しい方には「現世の混乱は神霊の世界においてのみ正されるから神界の招きによって出かけなければならない」とおっしゃって居られたそうです。

四月二十九日午後七時二十分容態が急変し（おそらく動脈瘤破裂によると思われます）、九十八歳と四ヶ月の御生涯を終えられました。

ここに大先輩の御冥福を心よりお祈りするとともに、霊界における御活躍をお祈りして、人類をお救い下さるようお願い申し上げます。

愛と信念に生きた人
小山田四郎氏（T7卒）逝く

渡部誠一郎（S25卒）

小山田さんは〝人生とは愛のみである〟が口癖だった。そしてこの口癖通りの人生を歩み、愛の偉大なる財産を残して黄泉の国へ旅立って行った。四月十七日午前八時三十六分、秋田市の中通病院でのことだった。享齢八十一歳。

胃ガンのため激病の日々が続いた筈なのに「苦しい」と漏らしたことは一度もなかったという。そして穏かな死に顔からは、あの人なつっこい「チョビひげ」が消えていた。昨年五月に初めて入院した際「手入れが出来ないから」と剃り落としたのだという。如何にもダンディを身上？とした小山田さんらしい処し方である。

この人の経歴は、なんとも輝かしい。〝穀倉仙北〟の大地主・小山田家の次男に生まれ、長兄は代議士四期を務めた義孝氏（昭和38年66歳没）。早大哲学科卒、旧強首村長を経て二十六年から五十四年まで県議（自民）を七期。この間、県会副議長、県教育委員、秋田至仁会長、社会福祉法人松寿会理事長……ときらめく。

が、その生涯をたどるとき、太平洋戦争を境に大きく変容するのである。つまり戦時中は陸軍大尉として中国などを転戦し、戦後は一転して社会福祉にのめり込むのである。なぜか。小山田さんを知る人たちの話を総合すれば、ビルマで例の「インパール作戦」に参加し、筆舌に尽くし難い〝死の行軍〟の末に〝生きて帰れる奇跡〟に恵まれた。以後の人生は〝拾った命〟の完全燃焼に務め、それが亡き戦友たちへの何よりの弔いと考えていたようである。

福祉の足跡をみてみよう。第一は東京・杉並に県出身の在京女子大生三十人を泊めるための、「友愛学寮」を造ったことである。ご本人の自叙伝ともいうべき「星おちる日の記録」によれば、自慢の長男（東大助手）が寮の建設途中で病没した。小山田さんは「彼は寮の人柱になったのだ。だが、私は一人を失った代わり、三十人の娘を得た」と書いている。

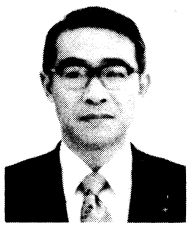
次は刑余者の更生を図る至仁会の会長。その延長として秋田市浜田に老人ホームを建て、それがさらに盲老人ホーム、特養ホームへと拡がった。票にならない秋田市で、命を張って仕事をした稀有の県会議員だったのである。

若いころはマンドリンを良くしたといい、愛唱歌は白秋の〝からたちの花〟。そして好きな和歌は啄木の〈こころよく我にはたらく仕事あれ、それを仕遂けて死なむと思ふ〉だった。

大変な親孝行で、老母をオンブして秋田駅の跨線橋を渡ったエピソードも。昭和五十四年県文化功労者、没後に勲三等瑞宝章。クリスチャン。四男二女が健在。

提言
「だより」利用と年次の役割

長野佳司（S29卒）



毎年三月に行われる卒業式の日同窓会入会式があるが、これは一つのセレモニーとして、翌日になれば忘却がはじまり、「秋高＝母校」を知りつつも年月を経るごとに意識が薄れて、現実のウェートが高くなり、時たま新聞スポーツ欄に「秋田高」を発見した瞬時だけ思い出し、同窓会からの手紙が来れば、寄付、広告、募金しかない。「同窓会＝金」という連想しか出て来ないのが普通の同窓生の感触と思う。

明治十三年の第一期卒業生から今日までの百余年間、総勢三万余人の同窓生の大半が、いや七、八割がそのように思っているのではあるまいか。ある意味で秋中時代の大先輩が羨しい。旧友が百人時代、二百人時代とあっても、五年間同じ屋根の下におり、今では考えられない珍エピソードを作り、話題にこと欠くことなく、交流内容も濃く恩師とスキンシップも出来た。しかし昭和二十七年卒以後はどうだろう。四百、五百の旧友そして三年間、進学中心の勉学と自己中心の世界。このような秋高卒の同窓旧友は今や全体の七割になろうとしている。正に世代の交代と言っても良い状態になって来ている。

このような秋高同窓会の中で創立百周年を機会に発行された「同窓会だより」は非常に意義深いものであり、全国的にも希少なものと思う。苦しい中でよくぞ二号までまる六年間頑張って来たものと関係各位の努力に深く感謝するものであるが、同窓会は秋高とともに不滅のものであるのだから、来たるべき将来のために旧友と母校秋高をつなぐ唯一無二の情報源「同窓会だより」を今一歩同窓会組織の基盤作りの手段としての役割を持たせるべく次の提言をするものである。

「『だより』の配布は年次でやろう。」そのためには「年次としてのスタッフを集め年次組織を作ろう。」

「名簿の信頼度を上げる努力をしよう。」

「だより」年二回の送付にかかる金は諸経費を見ても年間旧友ひとり当たり二百円を見ればよい。やり方によっては、百円でも出来る。「だより」送付の時は消息不明者調査資料を必ず入れる。また旧友のニュース、恩師の消息、母校のミニ・ニュースも入れる。出来るなら事務局を固定化する。封筒書き、封筒入れ、切手張りは手分けしてやる。旧友五人でやれば一人百通である。その気でやれば一年間に延べ六時間もあったらツリが来る。そして年次旧友のことは年次の責任において取りまとめが出来るようにする。以上のことをじっとガマンして二年間やって見ようではないか。

すでに明後年の九月の創立百十周年を目指し諸行動が起こされている。当然金がかかる。「集めねばならぬ」ではなく、「オレもヤッカイなった秋高のことだ。川反で一杯ヤッタツモリで、十年に一度のことだ。〇千円でも出そうかな」という旧友を一人でも多くすることを考えたい。母校に在学し卒業した事実は如何なる事情があろうとも否定出来るものではない。

忘れかけている旧友に秋高を思い出させよう。その呼びかけの出来るのは同級・同期の仲間しかいないのだ。

以上思いつくままに「だより」の年次配布の利得を述べてきたが勿論現在組織され活動している各支部を否定するものではない。それはそれで、地域や職場における校友の交流は、今後とも一層強化されて行くべきものと思う。特に地域支部は県内においては学区制の問題から若手が激減して来ており、都会支部は都市のドーナツ現象から広範囲となり、加えて無関心派が増えつつある現状認識にあっては、最も話易い相手とは、同期、同級の級友ということになるのではあるまいか。

会員の出版紹介

○石田秀一（昭13卒）著
「秋田の医史」（八千円）
秋田市保戸野中町、石田内科の石田秀一氏の労作で、旧藩時代から明治中期に及ぶ研究である。
なお石田氏は昨年、「復刻版、**秋田医学会会誌**」を出版されている。

○丸ノ内久（昭2卒）著
「一つの灯」（二千五百円）
ヒューマン・クラブの第一回出版物として刊行された、丸ノ内氏の五冊目の著書である。
明治四十二年生れの著者が、大正、昭和の疾風怒濤の時代を〝一つの灯〟を守りつつ、あるいはわがままに、あるいは柔軟に、精一杯に生きぬいた自叙伝である。

○井上隆明（昭25卒）著
「近世書林板元総覧」（二万二千円）
井上氏の近業の一つ。武蔵村山市大南一―七七―一九、青裳堂から出版された（日本書誌学大系）近世の出版元の活動を網羅した労作で、研究者渇望の書である。

哀悼

勝山　数美（旧職）於京都55・8
中泉　俊雄（大12）於秋田55・12
北嶋芳二郎（大10）於能代55・12
山内　馨児（大11）於秋田55・12
木村　弊松（大7）於東京55・12
佐々木竹治（大15）於秋田56・1
佐藤久之助（大8）於秋田56・1
草薙陸奥麿（昭2）於仙北56・2
川口　大助（昭10）於東京56・2
中村　重雄（昭28）於秋田56・2
菊地正四郎（昭7）於秋田56・3
奈良隆之助（大10）於秋田56・3
近藤　豊治（大5）於北秋56・3
小山田四郎（大7）於仙北56・4
藤井麟太郎（大7）於東京56・4
今　喜久男（旧職）於仙北56・4
諏訪　富多（明34）於鹿角56・4
南浦　陸郎（昭17）於秋田56・4
三浦　昭次（昭29）於秋田56・4
齋藤　源司（昭11）於秋田56・5
池見　元二（昭8）於秋田56・5
大貫　五郎（大8）於秋田56・6
北島　一（昭7）於秋田56・7

佐野薬品株式会社
〒010 秋田市卸町3の7　TEL62―6644
臨床検査薬専門商社
㈱秋田佐野純薬
〒010 秋田市保戸野通町3の31　TEL65―2161
社長
佐野謙一郎（S20卒）

ヤング
理容室
美容室
高橋郁夫（S29卒）
秋田市大町1―2―45
TEL62―6972

外旭川クリニック
三浦稔夫（S29卒）
秋田市外旭川
TEL六八―二四四五

秋山皮膚科医院
秋山まり子（S29卒）
秋田市新屋元町二二―一〇
TEL二八―二二一一

弁護士
豊口祐一（S34卒）
事務所 〒〇一〇 秋田市川尻御休町一番一七号
TEL〇一八八―六四―六二二八(代)

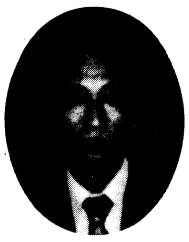
秋田不動産株式会社
代表取締役
菊地国晴（S34卒）
秋田市山王中園町一一―七
TEL秋田六四―九二九一(代)

㊐東北電力㈱本店
常務取締役　平沢哲夫（S13卒）
理事・監査役室長　佐藤昇次（S16卒）
監査役室副調査役　太田恒雄（S21卒）
総合研究所電力研究室専門研究員　岩谷高四郎（S21卒）
営業部次長　菅野淑夫（S24卒）
営業部次長　藤盛光生（S24卒）
企画室調査役　大場碩彦（S25卒）
企画室調査役　立川三男（S26卒）
営業部調査役　横山修司（S26卒）
工務部副調査役　佐々木邦生（S27卒）
情報システム室システム設計課長　鈴木宏輔（S28卒）
総務部管財課主査　千葉勝司（S29卒）
企画室総合計画課長　新田目倖造（S30卒）
技術部副調査役　佐藤明郎（S30卒）
配電部副調査役　近藤勲（S34卒）
給電部給電課副長　斎藤学（S34卒）
工務部送変電建設センター送電調査課副長　田口忠稔（S36卒）
営業部営業課主査　神谷謹一（S37卒）

息子と私との『秋田高新聞』

渋谷　潤（昭27卒）

二年前の昭和五十四年正月、ひとりの学生が私を訪ねて来た。「秋田高校新聞部の者だが、近く百五十号の特集をやるので、創刊の頃の様子を書いて欲しい」という来意だった。『秋田高新聞』という呼び名を、何十年来耳にしなかった私にとって、嗟に、当時に想いを馳せるには時間がかかった。生み落した子が、すでに百五十歳（？）になったのだから致し方ないにしても、不確実な想い出の糸を手繰って、創刊号発行の経緯や紙面構成、対外的活動などをどうにか一文にした。（秋田高新聞百五十号、二面所報）ようやく書きあげた原稿を受け取りに来た学生は、私の



息子が現在中学二年生だと聞くと、〝是非秋高を受けて新聞部に入るよう勧めてくれないか〟と、熱心な事前PRに努めて帰えって行った。

そんな事も忘れていた翌昭和五十五年春、息子は首尾よく秋田高校に入学した。入学式の日、〝ぼくは理科系が好きだから物理部に入る〟と語り、現に旬日を経ずして入部した。だが間もない日、〝新聞部にも入った〟とのいきなりの言葉に私は唖然とした。過去に、私が秋高時代（当時秋中――秋南校）に学校新聞に籍を置き、ブンヤの端くれ如き振舞の断片を家庭内で語っていた事があったがそれが息子の頭にあったのか？一言も入部しろとは、仮にも言った覚えはないのに……。蛙の子は蛙と言わぬまでも、私にとっては思いがけぬ親子の共通の場が生れたような気持になったものである。

程なくしてインキの香も新しい『秋田高新聞』を息子から手にして、我が青春の新聞とは余りにも隔世の感があることに困惑した。やたらに論評調記事が多い、自己主張が前面に溢れている……いや

先輩訪問（その四）

金山和義氏（S7卒）

昔の秋田中学には、とてつもない生徒がたくさんいたようだ。その中で、在学年数が長くて、傑作な逸話が語り継がれているのは、在学十年の石川定治（M38卒）と九年間の金山和義の二先輩であろう。金山先輩は史上第二位の記録保持者である。

秋田市下北手松崎字大巻26―182のお宅に参上して驚いた。庭一面に足の踏み場もないほど、ギッシリと盆栽が充満している。

金山さんは明治44年8月12日生れだから満70歳。ニコニコと元気に話してくれる。話題はまことに豊富で、しかも多岐にわたる。

大正13年、秋中入学。一、二か月で体を悪くして休学。そして、昭和7年卒業だから、九年在籍したことになる。その間にいろいろな人たちとすれちがった。

――やあ、同級生や後輩が先輩になって学校に遊びに来てはタバコを吸ってるのを見るのはつらかったですよ。ハハハ……。

――でもネ、落第もいいもんですよ。ヒトの五倍も同期生がいるわけで、とにかく友人が多い。その点、私は幸せです。仕事の上でも大きなプラスになってますよ。

金山さんは柔道部に入った。体は小さい方から二番目だった。

――弱みを見せたくないためにキカナイことばかりしたんでしょうね。まあ、ケンカシで不良で手がつけられないような生徒でしたよ。体は小さかったが度胸ではだれにも負けなかった。

一回目の三年の時、北海道への修学旅行で、地元の中学と大ゲンカをして停学になっている。

――本物の不良は社会に出てからでもダメだが、バンカラは、筋の通ったものはいい。生徒の時キカナカッタ人、落第生、不良と言われた者こそよくなる。

金山さんはケンカばかりしていたわけではない。釣の名人でありまた、植物が好きで、学校に園芸部を作ろうとしたが、機熟せず許可されなかった。

秋田市役所や東京都に勤め、役人生活を続けた金山さんの理想は山の奥にひっこんで盆栽作りを楽しむことであったが、現在のお仕事は、国連秋田県本部の事務局長である。

金山さんは、三つの信条を示してくれた。

○人に迷惑をかけぬ。
○ウソ、イツワリは言わぬ。
○義理人情は尽くす。

――酒、タバコは卒業後ずっと飲まなかった。国連に入った53歳の時から飲み出しました。ふだんからホラばかり吹いてるから吹いただけはやらなければならない。ハハハ……。

正直で、好きなことを思い切りやってきた金山さん、奥さんがおんぶしてる可愛いお孫さんがメンコクテメンコクテならぬと言う。

サツキの花にかこまれて明るく笑う金山先輩は、碁四段、麻雀二段、将棋三段、柔道三段、まさに人生の達人と称すべきであろう。いつまでもご健康でご活躍されることを心から祈るものである。

（一関　記）

佐藤文雄氏（大12卒）個展開催

佐藤文雄氏（東京芸大卒）は、この度喜寿を記念して、画集を刊行、これを機に、左記のように個展を開催することとなった。同窓諸氏の御高覧をお願いしたい。

○期日　十一月五日～十一月十日
○会場　本金デパート四階催事場

同氏の昨年の発表作「白い丘」（文部大臣賞受賞作品・一五〇号）は、秋田市文化会館に陳列されている。また母校の創立百周年を記念して、母校研修会館および会議室に、同氏から作品三点が寄贈されている。なお第二研修室（和室）床の間には、生徒の情操教育のためにと、色紙「ポピー」（水彩画）一枚を御恵贈いただいている。

太田一高 佐竹高 親善野球試合

去る四月十二日、秋田市と姉妹都市である茨城県常陸太田市で、常陸太田ライオンズクラブ、秋田ライオンズクラブの交歓行事の一つとして地元の太田第一高校、佐竹高校と秋田高校との親善試合が行われた。

四月十日夜、雨の秋田をバスで発って翌朝、常陸太田市へ着き、さっそく太田一高の先生達のご案内で常陸太田市にある佐竹寺をはじめ、佐竹氏ゆかりの史蹟を見学常陸太田市と秋田市の因縁に強く感銘をうけた。

夜は、昨年太田一高が九〇周年の記念事業で建てた立派なセミナーハウスに泊めて頂いた。

太田一高は毎年、卒業二五年卒と五〇年の先輩を招き、昔を偲ぶ行事があり、その先輩達がその折ここに宿泊するための施設でもあるといわれる。

尚、同校には明治三七年建造の文化財指定の講堂が、昔のまま保存されており、同窓会も、かつて入学式、卒業式を行ったこの講堂で開くという、大変羨しい話である。

親善試合の結果は秋田高8対3太田一高、秋田高7対1佐竹高と勝利をおさめ、応援の秋田ライオンズクラブ諸氏は大満悦であった。

慶祝

◎勲三等瑞宝章
大黒屋栄一（昭2卒）
山本　一（元校長）

◎勲五等瑞宝章
佐藤　幸助（大8卒）

おわび

11号に掲載した慶祝欄で、佐藤久一氏、佐藤貞之助氏の二人を勲三等旭日中綬章と紹介しましたが、それぞれ、勲四等瑞宝章、勲五等瑞宝章でした。深くおわびいたします。

秋高同窓会史稿 ❺

◎同窓会支部設置

同窓会報第12号（大15・11）によると、支部の設置を勧誘したところ、これに応ずるもの多数に及び、県外では京都、大阪は既に成立し、県内は五城目、能代、本荘にも設立されたとある。

○京都　支部長　池田謙三
　幹事宮田　一、加藤謙一
　○荻原　栄二○枝川　明雄
　○今村久吉郎（○印常任）
○大阪　支部長　佐々木駒之助
　幹事逸見　信躬、竹谷京之助
　○小堀　三郎○高橋　高
○五城目　支部長　今村久蔵
　幹事宮田御代蔵、笹尾　長
○由利　支部長　井上大鬼智
　幹事渡辺　綱次、小田忠一郎
　進藤　利正

以上のほか、仙台、東京、弘前、北海道などでも計画され、支部は年内に発会する予定とある。

会員の増加と時代の進運に伴い連絡を密にし会務の進行を図るためには支部の必要が痛感されたのであろう。

同窓会報第13号（昭2、11）では、北海道支部は、六月十日、支部総会を兼ねて母校三年生修学旅行隊歓迎会を開いており、原弘道幹事が開会の辞を述べ、田所哲太郎支部長が挨拶している。

大阪支部では、第二回例会を報告しているが、母校五年生修学旅行隊来阪についての案内、その他が議題となっている。

支部の活動の中には母校旅行隊の歓迎が含まれているのはなつかしい。（筆者＝昭14卒も修学旅行で東京で先輩からカレーライスのご馳走になり、佐竹邸で食べ放題の菓子の園遊会のもてなしを受けた思い出がある）

同窓会報第14号（昭3・11）の支部便りを見てみよう。

○仙台　支部長　須田　実
　幹事三神　正苗、寺沢　修一
　深味　三郎、赤星幸次郎
　古沢　斐、三神　正
　三沢　清香、宇都木隆次
○京都　支部長　湊　三郎
　幹事長岐　鷲朗、青柳　安誠
　介川　武夫、橋本　長利
　本郷　太郎
○東京　支部長　町田忠治
　幹事佐藤　得斎、遠山竹三郎
　森沢徳太郎、佐藤　良一
　武藤重太郎、高根　清
　東海林治助、遠藤　円乗
　三浦　捷治、三浦　展

◎母校御大典記念事業

――仁別の造林――

同窓会報第14号（昭3・11）に「今上陛下御即位大典を記念するため母校は今夏以来奔走し秋田営林局、秋田営林署の助力と南秋田郡旭川村役場当局、同村仁別住民一同の好意を得て「粟畑台百〇二ノ内三町一段五畝歩」を借用し杉樹造林に決定し在校生をして該地の下刈をなさしめ明春四月下旬秋田営林局並に秋田営林署指導のもとに植樹することとなりたるは慶賀の至りに堪へざるなり。」と報ぜられている。

同窓会報第15（昭4・12）には、御大礼記念造林の完成が報ぜられている。

「今上陛下　御大礼を記念すべく西居前校長は昭和三年八月一日植林に決定して其向きへ報告と同時に内外心血を濺いで計画したる記念造林は旭川村役場当局、仁別部落の了解を経、秋田営林局及秋田営林署の厚意に依り優良なる杉苗一万一千本を無償譲与せられたるを以て今春来数回に亘り専ら四五年の上級生を督励し両局署員監督の下に面積三町歩余に植栽を終りたるがやがて之が成長して林相を為すに至らば実に好箇の記念となり百歳の後ち其余慶に与かるを得べし」

同窓会報第16号（昭5・11）には、本年度の行事として、四年生は春季の下刈り、五年生は秋季千五百本補植をしており、なお、教育勅語渙発四十年記念行事の一つとして記念碑、境界線の標石を建設、記念碑を囲んでの写真を掲載し、「因に春季の下刈は向ふ七、八年間これを行ひ、補植は明春の植樹を以て打切る予定なり」とある。

同窓会報第17号（昭6・11）には次のような記事が見られる。

◎秋田中学校校友会の記念造林

御大礼記念造林は植立て後既に三ケ年を経過し、年々春秋の候下タ刈りと補植を為したる結果本年春頃よりめきめきと生育し既に新茎の見えた部分もあり、根張りも充分になったので去る十月十六日四五年生は最後の補植と下刈に出かけた、監督は例に依って秋田営林署の成田武夫属（先輩）を煩し隅から隅まで丁寧に巡視指導して下さったことは何時もながら感謝に堪へない、斯くして総植栽数は一万二千余である。これが百年の後は校友会唯一の財産として天下に誇るに足り之が計画を敢てしたる西居、小松両校長並に参与したる各関係の功労を称ふるに足らん。

公認会計士
堀井照重（S34卒）
事務所　〒〇一〇　秋田市山王六丁目一番一号山王ビル
TEL秋田六四―一五二二(代)

(資)一力
堀井軍平（S34卒）
秋田市山王中園町3―8
TEL63―7533

東北電気工事株式会社
専務取締役　藤原敬司（S16卒）
常務取締役　佐藤儀一（S18卒）
調査役　藤井吉男（S16卒）
営業課長　佐々木崎（S29卒）
総務課長　沢田節夫（S31卒）

旅館と茶寮
日本観光旅館連盟会員
秋田県指定史跡文化財
名園 如斯亭（旧佐竹公別荘）
丸野内久（S2卒）
丸野内駿（S36卒）
秋田市手形からみでん☎(34)―五六四一(代)

(株)第一会館
取締役社長　信太勝（S16卒）
秋田市大町五丁目一―一七
TEL（二三）四一四一番

大民施設工業㈱
常務取締役　大島駿一（S37卒）
秋田市山王一丁目三―一

井 株式会社 藤井材木店
代表取締役　藤井雄吉（S38卒）
秋田市川元小川町四の一〇
TEL六二―三三一八

株式会社高井南茄園
代表取締役　高井善憲（S38卒）
秋田市卸町二の九の二
TEL六三―一三五一

株式会社瀧不動産
取締役営業部長　本山恒昭（S38卒）
営業企画部部長代理　木村真（S38卒）
秋田市山王三丁目七番一号
TEL六三―三二二二(代)

総合建設業　中央土建株式会社
専務取締役　伊藤久一（S38卒）
本社　秋田市外旭川字在家四八番地の一　TEL六八―三三二二(代)
自宅　秋田市大町一丁目七番二七号　TEL二三―七六一九

かとう歯科医院
歯科医師　加藤二郎（S38卒）
秋田市広面字野添一一六
TEL三四―〇五〇五

㈱アキタパークホテル
取締役総支配人　畠山樹之（S38卒）
自宅　秋田市外旭川字八幡田五五の四
会社　TEL六二―一五一五(代)

随想

卯申会の人びと

冨野己代治（昭7卒）

卯申会の会員の殆ど大部分は、昭和二年（丁卯）秋田高校の前身秋田中学に入学し、昭和七年（壬申）に同校を卒業している。

卯申会はこれら同期生たちの集まりの名称なのだが、卒業後すぐに名づけられた訳ではない。

戦後、県民館長だった石井彪君の音頭取りで、月に一ぺんずつ会合を持ったりしていたころ、花岡泰順君によって命名されたように記憶している。

昭和五十二年四月、卯申会は入学五十年、卒業四十五年を記念して、全国同期会を開催した。物故会員の慰霊祭を行い、記念植樹を行い、また恩師を交えての懇親会を行った。

物故会員の数が六十名を越していたのに驚かされたが、壁頭組、秀才組の人びとが沢山その中に含まれているのにも驚かされた。

小尾善一郎、仁平久俊、青山亮、小泉勝雄、中村宗順、伊藤毅、木村正三、君らが生きていてくれたら、それぞれ卯申会の名を高くする人物に成長していたに違いないと思う。

またスポーツ選手として活躍した、甲子園のバッテリー佐久間恂、堀松理紀之助両君、剣道の和崎嘉之君らの死も惜まれる。

殊に和崎君は出世者の少ない卯申会員の中では、珍らしく活躍したほうで、関西財界では鳴らした存在であったのに、十年ばかり前食道癌で亡くなった。

庄司邦太郎、中田正直、佐藤栄一君ら大資産家も早く亡くなった。

卯申会では昭和五十七年卒業五十年を記念する会合を持つ予定であるが、昨年大曲市長最上源之助が急逝したのは残念である。

卯申会には、他の同期会にくらべて、所謂偉い人は少なく、偉い学者も医者も実業家も政治家も役人も金持ちも少ないのが特徴であるが、そうした中にあって、最上君などは政治家としては割合成功した方であろう。

現在残っている会員の中で活躍している人としては、清酒出羽鶴社長の伊藤恭五郎君や、弥高会館の北嶋一君、兼坂産業の兼坂信義君などが挙げられるが、たとえ出世型でなく、平々凡々たる存在であってもよい、卒業五十年、六十年と、いつまでも健康で、顔を合わせることができれば、これ以上の幸せはないと考える。

卯申会の人びとよ、お互い健康に留意して、いつまでも長生きしようではないか。

運動会に思うこと

柴田協子（昭32卒）

この四月から、長女が母校にお世話になっている。七日の入学式は、二十七年前を思い出して、やはり感慨深いものがあった。

私が入学式した当時は、駅前に校舎があった。

先生方にはあだ名のある方が多く、お写真を見たりすると、とても懐かしい。当時の先生方の中で山下先生、山谷先生、舘岡先生、小笠原先生が現在もご活躍中である。

五月初めに、運動会があった。ちょうど東部公民館に用事があったので、帰りに寄ってみた、校庭の回りで見ていると、女生徒がお茶を配ってくれた。むし暑い日でのどがかわいていたので有難たかった。

私達の頃は、女生徒はアナウンスとか、救護の仕事はしていたが見学者にお茶のサービスはしなかったと思う。

私は、とても嬉しかったので、余計なこととは思ったが、校長先生に一言お礼を述べたくてハガキを書いた。すると間もなく、校長先生からご丁寧なお礼状を頂いた。

住所も書かず名前だけだったしお返事を頂くなど思ってもいなかったので、かえってご迷惑をおかけしてしまったと後悔した。

運動会というといつも思い出すので娘にも話したのだが、運動部対抗のリレーではバトンがわりに部の象徴的な道具を使っていた。

一番気の毒なのは柔道部で、畳をかついで走らなければならない、伝統的に最下位の座を維持せざるを得ない。

私は、紫雲隊で、紫はスクールカラーだしとても好きだった。

紫雲隊でうれしかったのは、二年先輩の日高淑子さんも一緒だったせいもあった。

スラリとした長身で、笑顔のチャーミングな方だった。姉さんとは中学の同級生だったので、憧れのお姉さんだった。

大学でも先輩だったが、四年の時亡くなられ、中学・高校・大学と一緒だった三木（現今野）瑤子さんとお葬式に行った。

皆でお棺の中に白菊をいっぱい飾った。美しいお顔は、少しも変わっていなかった。

その後、妹さんは私の兄と結婚し、日高さんとはご縁が深くなったが、妹さんも二年前、二人の子供を残して亡くなってしまった。

心臓にペースメーカーをつけておられるお父様はいたいたしかった。天徳寺へ納骨のため、兄一家と一緒にお母様とお兄さんの一雄さんが久し振りに秋田へ来られた。

悲しいことで、懐かしい方々と再会できることができた。

娘は、百メートル走で一位だったと、喜んで帰って来た。そして柔道部は、畳をかついで走った、可哀想だった、と私に報告した。

私は、毎年畳をかついで走っている柔道部の選手に、これからもへこたれずに頑張ってほしいと心の中で声援を送ったのである。

満州における秋中との結びつき

太田好一（昭26卒）

私はひとより三年もおくれて秋田南高を卒業した。昭和26年3月、駅前の木造校舎においてであり校長は中川秀松先生であった。おくれたのは就学前の虚弱体質、小学校四年時の病気による休学、それに敗戦による勉強の空白のためであった。親父が南満州鉄道株式会社、すなわち満鉄の社員であったため、生まれてから旧制中学の二年まで、あの自然の風土・環境の影響のもっとも受け易い多感で柔軟性に富んだ時期を、高粱畠と紅い夕陽の印象的な満州（現・中国東北部）で過ごした。満州事変の勃発（一九三一）、国際連盟脱退、日華事変、第二次世界大戦、大政翼賛会の発足、太平洋戦争の開始（一九四一）、B29の東京大空襲、広島・長崎での原爆投下、第二次世界大戦の終結（一九四五）、日本国憲法公布、天皇人間宣言（一九四六）といった歴史の流れはすべて、大陸に勢いよく噴出した日本民族のエネルギーのなかに包まれて若い肌にじかに感じとったといってよい。敗戦の頃の在満邦人数はほぼ二百万人に達していたといわれる。今にして思えば、いわゆる開拓鉄道の使命を、鉄道はもとより炭鉱、そしていろんな重化学工業、産業の発展という形でみごとに果たしつつあった満鉄王国の

誇るべき夢のような繁栄ではあった。その満州時代、秋中と結びついた縁が二つあった。その一つは親父が鉄嶺にいた頃、満鉄鉄嶺図書館長の東海林太郎氏（T5卒）と付き合いがあり、それも同郷の誼でかなり親しい間柄の交際であったということである。まだ歌手になる前とはいえ、家の座敷で時々品格のある美声を披露したとか。その後そのせいか幼い頃から「赤城の子守唄」「国境の町」「野崎小唄」「麦と兵隊」等のレコードはよく聞かされたものである。いま一つはあの鎌田喜市郎先生に新京一中時代、国語を教わったことがあることである。秋田師範出身の親父と同期生とかで当時、家に時々遊びに来られ、秋田のしょっつる鍋をつっつきあったものである。新京一中といえば満州の首府、新京特別市のエリート校で、校長が陸軍中将、まるで陸軍幼年学校的な雰囲気で勉強と尚武の盛んな、しつけのきびしい学校であった。

ちなみに優れた近い先輩の一人をあげると、現在東大文学部教授の小田島雄志がいる。彼はシェイクスピアの作品の逍遙訳につづく二番目の個人完訳を出し、井上ひさしの言うように、一つの「文学的事件」と称すべき大偉業をなしとげた。さてその学校に入って間もない頃、約十数名の同級生が体育の時間におくれないようにと急いで準備し、グラウンドに出るべく廊下をドタバタ突っ走った。ちょうど隣の教室で授業をやりかけていた鎌田先生が烈火の如く怒り、直ちに教室前の廊下に正座させられた。私が代表して平謝りにあやまったが、なかなか許して下さらず実に苦い思いをしたことがある。

短気で早口でおまけにずうずうの秋田弁で、その授業に慣れるまで容易でなかった。それでも検定あがりの実力者ということで大そう尊敬されていた。名簿を繰ってみると秋中には昭和10年4月から15年11月までおられたようである。その鎌田先生も敗戦を新京で迎え、あの混乱と恐怖のなかでそれこそ地獄のなかの生活をし、やっとのことで21年7月、胡芦島・博多経由で秋田に引揚げて来られた。その思い出は「終戦前夜」（S51・10刊）にまとめられているが、私自身、身をもって体験しているために一言一句ひしひしと胸に食い入るのである。（秋田県立本荘高校勤務）

いいなあ、選手は

工藤武雄（昭9卒）

食べ盛りの中学生が、この日ばかりは学校の予算で、中華ソバなど、たらふく出たので、いいなあ、選手は、と思った。

二、カフェからすたこら

待望の修学旅行が中学四年に実施された。

旅行のグループ編成は、好きな者同志ということになり、私たちは、北潟勝君（前公明党県本部長）たちと数名で、陸上競技部に席をおいた者だけのグループをつくった。お互い足が速いから、大阪や京都で他県の暴力中学生にからまれたら、百米十二秒で逃げようなどと、冗談まじりで話しあった。

京都に到着したら競技部の先輩たちが待っていて、なにくれとなく、もてなしてくれた。

秋中の先輩・後輩のつながりの深さ、暖さに心を打たれた。

ところで、先輩たちは、京都を案内してくれたついでに、田舎者の中学生に珍しい体験をさせようと、当時のカフェーに案内してくれた。

私は、カフェーというのは、白粉をつけた恐しい魔性の女がいるところだという先入感を持っていたので、店に入るや否や、たった一人でスタコラさっさと逃げ出した。今、思い出しても笑いがほとばしる。

三、柔道の対抗試合

校内の対抗試合にはいろいろなものがあった。その一つ、柔道の思い出がある。

私は痩せていたが、背が高く足が長くて、内股が得意であったのでいい気になって試合に出たことがある。

立ち上ったとたん、相手に背負い投げをかけられてズデンドウ、おかげで肩甲骨を折った。

もっとも、その後、一級となり、師範学校を出てから初段となった。お恥しい次第である。

《へんしゅうしつ》

「だより」12号、遅れて申しわけありませんでした。編集員一同、多忙な者ばかりで、その上一学期末にかかってしまい、物理的に圧されて遅延、心からおわび申しあげます。ご迷惑をおかけしました。ご寄稿の方々、ご協力ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。

鈴木内科医院
院長
鈴木佑一（S16卒）
秋田市中通三丁目三番二四号

秋田三菱自動車販売㈱
取締役社長
三浦金次郎（S16卒）

秋田県議会議員
秋田土建株式会社
北林照助（S20卒）
秋田市山王五丁目六番二〇号
TEL〇一八八—二三—二五七九

富永内科医院
院長
富永哲夫（T6卒）
東京都新宿区西落合三—一八—二
TEL〇三—九五一—二五六五

㈱弘報社
社長
吉成一郎（T13卒）
会社　東京都千代田区内幸町一—七—二四
TEL〇三—五〇二—一三五一
自宅　東京都東久留米市本町四—一九—九
TEL〇四二四—七一—〇三四五

㈱高陽堂
代表取締役
伊藤勝三（T14卒）
会社　東京都文京区本郷四丁目一〇—一
TEL〇三—八一四—四六一一
自宅　東京都板橋区大山西町四四—五
TEL〇三—九五六—一六九二

日高都市ガス㈱
取締役社長
宇佐見盛志（T15卒）
会社　埼玉県日高町下鹿山笠蓋四七三
TEL〇四二九八—九—四〇四一
自宅　保谷市ひばりケ丘北三—七—三
TEL〇四二四—二二—三〇六五

㈲松崎合金鋳造所
取締役社長
松崎信雄（T14卒）
東京都太田区東馬込2—17—1
TEL 03—771—3927

日本ローヤルゼリー㈱
代表取締役
木村元治（S2卒）
東京都千代田区九段南三—四—一二
TEL 勤務先〇三—二六一—一〇七九
自宅〇三—二六一—二九八五

高橋栄治郎（S3卒）
東京都渋谷区神宮前四—一三—一五
TEL〇三—四〇一—七九八一

三田海運㈱
社長
三田茂（S26卒）
勤務先　東京都千代田区神田神保町3—9高橋ビル二F
TEL03—363—0901
自宅　東京都江東区大島4—2—910
TEL03—685—4247